

地方創生と伝統行事 —土地の記憶を行動で共有する— ⑥「宇和島の八ツ鹿踊り」(前編)

専門職 平沼 浩

目 次

1. はじめに	(以下、後編)
2. 宇和島の八ツ鹿踊り	4. シカの生態
3. シカとシシと獅子	5. 鹿と日本人
	6. まとめ

1. はじめに

およそ2年に及ぶ新型コロナウイルスの脅威は、人々に感染リスクを減らすための人流抑制と密を避ける行動を余儀なくしてきた。この影響は、地域の伝統行事を担う人々が行事の開催を見送るにせよ制約を設けて実施するにせよ、葛藤と苦渋の判断を迫るものだつただろう。

「宇和島の八ツ鹿踊り」は、愛媛県宇和島市の宇和津彦神社の例大祭（10月29日）の一翼を担う地域の伝統芸能であり、そのルーツは東北仙台にある。市の無形民俗文化財としての登録名称は「八ツ鹿踊り」だが、県内および東北にも同類の名称が存在するため、本稿ではタイトルに「宇和島の」とつけさせていただくこととした。

令和2（2020）年の例大祭は中止（場所を限定し一部実施）、令和3（2021）年も中止（人を集めない配慮の下での一部実施）となった。こうした中で令和3（2021）年の宇和島の八ツ鹿踊りは実施された。10月下旬は感染者数も全国的に減少に転じ、感染対策を継続しながら以前の日常を模索し始めた頃にあたる。

前編では、主に宇和島の八ツ鹿踊りの特徴

や注目点を紹介したい。前編のキーワードは、「伊達」、「靈獸」、「小学4年生」である。

なお、次回後編では、生物としてのニホンジカの生態、古代から現代までの鹿と日本人の関りを「靈獸」、「狩猟獸」、「害獸」の3つの観点から具体例をあげて考察する。

（1）宇和島の歴史と風土

『古事記』の国生み神話では、二番目に誕生した島を伊予之二名島といい、「身一つにして面四つ有り。面ごとに名有り。」としたうえで、四つの国それぞれの名を二つずつ紹介している。伊予國の別名は愛比売であり、こ



宇和津彦神社から臨む宇和島城。筆者撮影（以下同じ）。

れが愛媛県の県名の由来となっている。

古くから伊予国であった愛媛県では、県域を東から東予、中予、南予の三地域で呼び習わしている。宇和島市は対岸が九州となる南予地域の中核都市であり、宇和島城を中心に発展した城下町である。

愛媛県歴史文化博物館の展示によれば、宇和という地名が記された税^{みつき}の木簡が平城京で出土しており、既に奈良時代には宇和郡は確立していたことが分かる。ただし、その本拠地は、宇和島市ではなく愛媛県歴史文化博物館のある隣接市の西予市宇和町周辺だった。

文禄4（1595）年、宇和郡の領主となつた藤堂高虎は、それまで板島と呼ばれていた島の名を宇和島と改名し、慶長6（1601）年に五角形の海城である宇和島城を築城する。それは、豊臣秀吉の文禄・慶長の役の頃と重なる。

やがて、徳川の時代となり、大坂夏の陣の功をもって伊達政宗の長子秀宗が、慶長20

（1615）年に宇和島藩10万石の藩主として入部し、以来藩主の国替えもなく幕末まで宇和島伊達藩は継続した。仙台、宇和島両伊達家の縁で宇和島市は、宮城県仙台市と姉妹都市の関係を結んでいる。宇和島城は、現存する天守12のうちの一つであり、現在の形は二代藩主宗利による。城下町建設の過程で海岸部の埋め立てが進み、かつて海城だった宇和島城は、町の中心部にこんもりと盛り上がる城山のランドマークになっている。

市内の高校生の手作り地図に、「セカチューの本当の舞台」とあった。小説『世界の中心で、愛をさけぶ』（2001）の作者である片山恭一は同市出身であり、固有名詞こそ用いられていないものの、作中に出てくる城山の特徴や白い天守閣に当てはまるのは宇和島城以外にない。主人公の通う高校が、正門を出るとすぐにグランドと博物館と大名庭園があり、庭園前に喫茶店があるという条件も市内の県立高校に当てはまる。また、主人公の親友の

家が養殖業を営みエンジン付きボートを複数所有するという設定も日本有数のリアス式海岸を擁し養殖業が盛んな宇和島の風土を反映している。主人公が漁協でパンと牛乳を買い、無人島で農協ごはんのパックを使って夕食を作るのは、漁業と農業が身近な存在であることを物語っている。小説の情景モチーフは、やはり宇和島市である。

宇和島の風土について、日本学の泰斗であるドナルド・キーンの一文を紹介したい。

「宇和島は位置としては世界有数の美しい町だと思う。四方に山があって、オーストリアのインスブルックを思わせるが、段々畑になっている宇和島の山の方が綺麗である。そして海も見える。港はフランス南部のサン・ジアン・ド・ルースに劣らないで絵のように美しい。」（「四国さかさ巡礼記」より）

これは現在ほど交通手段が発達していない昭和32（1957）年に月刊『中央公論』に連載された旅行記からの抜粋である。紀貫之の『土佐日記』や夏目漱石の『坊っちゃん』にみられるような首都志向精神を逆手にとり、そのさかさまの志向で綴られている。

（2）闘牛と牛鬼とハツ鹿踊り

市内を歩くと、この土地の代表文化は、「闘牛」と「牛鬼」であると印象付けられる。「闘牛」は、勇猛な雄牛同士が闘志をぶつけ合う人と牛の無形民俗文化であり、四国ではここだけに存在する。市営の全天候型闘牛場があり、往来の発着点である駅前には、化粧回しで盛装した闘牛のモニュメントがある。

「牛鬼」は、首の長さ2～4m、胴体の長さ3～7m程の巨大な獣鬼であり、愛媛県南予地域以外に例のない無形民俗文化である。ちなみに、清少納言は『枕草紙』の「名おそろしきもの」（147段）の一つに「牛鬼」をあ

げている。

中心街のアーケードを進むと、天井近くに「闘牛」や「牛鬼」の大きなボード画が何枚も現れる。立ち並ぶ両側の店々の柱には、「牛鬼」の恐ろしげな頭^{かしら}が掲げられ、居並ぶ威風は壮観である。また、「闘牛」と「牛鬼」のデザインマンホールの多さに驚かされる。



南予文化会館の外壁を飾る「牛鬼」の絵。

では、「八ツ鹿踊り」はどうかといえば、アーケード街の大きなボード画もデザインマンホールも見つけることができる。

生身の現実である「闘牛」はさておき、宇和島名物の擬態の靈獸という点では、「牛鬼」も「八ツ鹿踊り」も共通する。異なるのは、季節であり演者であり役割である。前者の本番は盛夏であり、後者の本番は晩秋である。前者に息吹を吹き込むのは大勢の威勢のいい男たちであり、後者に息吹を吹き込むのは8



御祓いを受ける八ツ鹿踊りの演者。

人の少年たちである。前者の役割は邪氣を祓い鎮めることにあり、後者は除災招福にある。

2. 宇和島の八ツ鹿踊り

(1) 宇和島の八ツ鹿踊り

宇和島の八ツ鹿踊りは、鹿の群れ（雄7、雌1）に扮した8人の変声期前の少年（小学4年生から6年生）が、胸前の小ぶりな締め太鼓を奏でながら踊る除災招福の伝統芸能である。この由来を地元では、仙台藩主伊達政宗の長子秀宗の宇和島藩入部の折に供だって移り住んだ人々が仙台から携えたとしている。

演舞中の少年たちの表情と太鼓を奏てる様子は、頭上の鹿面の首から下がる前垂れで覆われているため外観からは分からない。また、これによりすっぽりと覆われた前半身は、鹿の長い首のように見える。

全ての音源は、少年たちの歌声と前垂れの中で奏でられる軽やかな締め太鼓のみで、それ以外のお囃子は伴わない。演者は完全に少年たちだけであり、観る者の感覚は自ずと彼らの清新な歌声とひた向きな拳動に注がれる。時折、太鼓のフチをカチャカチャと打つ音は、本物の雄鹿同士が角を突き合わせる際に発生する鹿角の接触音を彷彿とさせる。

動きの特徴は、スキップを含む足の動静であり、上半身は背筋をすっと伸ばしたままでほとんど動かさない。それもそのはずで、鹿面の重量は、後頭部から背中を経て尾に伸びた麻束を含めて約1キロあるそうだ。この麻は、お祓いに用いる大幣^{おおぬさ}と同じ素材である。

もう一つ見逃せないのは、鹿に威圧感が全くない点である。頭上の鹿面の頭は、枝角まで含めれば身長を50～60センチ嵩増し、成人男性以上の背丈になる。それでも威圧感がないのは、演者が少年であることに加え、鹿面の表情が実際の鹿同様に柔軟であることに負うところが大きいように思われる。

(2) 令和3年の遂行

例年であれば、宇和島藩総鎮守であった宇和津彦神社の例大祭（10月29日）は、お練りといつて、邪気を祓う牛鬼、地元では唐獅子とも呼ばれる邪気を祓う獅子舞、天孫降臨における導きの国津神である猿田彦と招福の巫女舞を舞う少女たちとともに、神社神輿を中心に城下町を練り歩くのである。

令和3（2021）年は、前年に続き恒例である前夜の宵宮は中止となり、例大祭当日は午前9時頃から獅子舞と八ツ鹿踊りの奉納とそのお練りだけが実施された。

既に市内の伝統行事は、宇和島の代名詞ともいえる定期闘牛大会が春夏とも中止となり、夏の「うわじま牛鬼まつり」も中止されていた。秋になり、ようやく落ち着きを見せた感染状況を踏まえて、県が警戒注意レベルを「感染警戒期」から「感染縮小期」に引き下げたのは10月20日だった。これを受け、翌々日に市長から感染回避行動に関するメッセージが出された。こうした中、秋の定期闘牛大会（10月24日）の実施に続き、宇和津彦神社の例大祭は中止としたうえで開催情報の発信

を手控えながら、人を集めない形での一部限定的実施となつたのである。

(3) 雌鹿隠しという主題

宇和島の八ツ鹿踊りの主題は、「雌鹿隠し」と呼ばれる一種の求愛成就の物語である。歌の内容を要約すると、まず、雄鹿の群れが行方知れずの雌鹿をこちらのお庭で探させて欲しいと願い出る。やがて雌鹿を見つけ、逢えて嬉しいと声を揃えて繰り返す。奥山の熊もそれを見て爪を揃えて面白いと囁き立てていると歌う。何とも可愛らしいハッピーエンドである。そして、故郷からすぐに戻れと文が来たと一同は退散する。この過程で、四頭の雄鹿が対面非接触の交差移動を交えたステップを繰り返し、恋のバトルを暗示させる。

こうして八ツ鹿踊りが披露された場所は、霧が晴れるかのような雌鹿発見のラッキースペースになり、逢えて嬉しいと繰り返されるハッピースペースになる。少年たちの透き通った歌声と軽やかな締め太鼓の音色、萩や紅葉やススキをあしらった伝統衣装が、独特の間と抑制のきいた所作と相まって、秋風の中



踊りの奉納。はじまりの場面。先頭（右）から4番目が雌鹿（枝角が無い）。

に爽やかで心地よい後味を残すのである。

(4) フルバージョンとショートバージョン

「雌鹿隠し」には、約13分のフルバージョン（文字起こしは次頁参考を参照）と約3分のショートバージョンがある。

フルバージョンの演舞地は、宇和津彦神社、昼食休憩地でもある名勝「天赦園」、例年なら大勢の見物人とお練りの伝統芸能が結集するアーケードと牛鬼ロードが交差する広場、そして浄土宗本願寺派明源寺の4か所だった。

「天赦園」は、小説『世界の中心で、愛をさけぶ』では単なる日常風景に過ぎない大名庭園だが、宇和島伊達藩二代藩主の頃に海岸を埋め立てて造成した浜御殿の一部であり、名称は初代藩主の父政宗が晩年に残した五言絶句の一節「天の赦す所」に由来する。令和2（2020）年の例大祭は中止だったが、場所を「天赦園」に限定し一部は実施されていた。

馬上少年過 馬上少年過ぎ、
世平白髪多 世平らかにして白髪多し。
残軀天所赦 残軀天の赦す所、
不樂是如何 楽しますして是を如何にせん。

明源寺の境内は、八ツ鹿保存会の稽古場であり、夕暮れを背景に父母や祖父母に向けて締め括りの演舞が披露された。今回卒業となる6年生2名に盛大な拍手が贈られた。

ショートバージョンが披露されたのは、お練りで廻る訪問先である。ショートといつても余韻たっぷりの前半が略されているだけで主題の骨格に変わることはない。訪問先は、病院、クリニック、歯科医院、デイサービスセンター、薬局、美容院、理髪店、青果店、食事処、地元メーカー、地元金融機関、その他一般の家庭などであった。訪問先の主人は、玄関先で一同を出迎え、演舞の一部始終を神妙な面持ちで見守っていた。

何処に何時頃訪れるかは、当事者以外に知られていおらず、少年たちの歌声や太鼓を聞きつけた近所の人だけが表に出てくる。2階3階の窓から眺める人の姿もあった。

医療関係の訪問先が多いのは、病院通りと呼ばれる医療機関の集積エリアが神社から近くもあるが、離れた場所のクリニックにも出向いていた。多く廻っていたのは、やはりコロナ禍での献身ぶりが再評価されたエッセンシャルワーカーの勤務地だった。

街角の反応で微笑ましかったのは、通りで偶然遭遇した若い母親が小さな娘に「カッコいいね」と微笑んでいたこと、「おかげでいいものが見られたよ」と笑顔で訪問先の主に感謝を伝えていた近所のご老人。そして、小児科クリニックの前で、院長をはじめ検診に訪れた母子たちが神妙な面持ちで演舞を見守る中、3歳くらいの幼児が一人で一生懸命に鹿踊りの足の動きを真似していた様子だった。

3歳児の感性を刺激したのは、足の動きだった。やはり、宇和島の八ツ鹿踊りの特徴や見どころの一つは、足の動きにあるようだ。



「天赦園」の芝生にて演舞。

(参考) 宇和島の八ツ鹿踊りの歌

(独唱) ソー——————り ゃー
 <締太鼓>トトン トトン トトン…

(齐唱) ハー ハー

(独唱) ソー——————り ゃー
 <締太鼓>トトン トトン トトン…

(齐唱) ハー ハー

(独唱) ハー————ソー————り ゃー
 <締太鼓>カチャカチャ カチャカチャ

(齐唱) ハー ハー

(独唱) ハー————ソー————り ゃー
 <締太鼓>カチャカチャ カチャカチャ

(独唱) ソー——————り ゃー
 <締太鼓>トトン トトン トトン…

(齐唱) ハー ハー

(独唱) まーわれ まーわれ

(齐唱) みーずー (水) ぐーるま (車) 遅く回りて
 壇にとーまるな 壇にとーまるな

(齐唱) ハー ハー

(独唱) なーかだちー (仲立ち) ^{※1}

(齐唱) 腰に差したる すだれ柳^{※2} 枝折り揃え
 休みなーかだち 休みなーかだち

(齐唱) ハー ハー

(独唱) じゅーさん (十三) ^{※3}かーらー

(齐唱) これまで連れたる めんじーし (雌鹿) ^{※4}を一ば
 此方のお庭に 隠しおーかれた 隠しおーかれた

(齐唱) ハー ハー

(独唱) なーんば尋ねてー

(齐唱) 居ーらばこーそ ひともと (一本) すすきー
 隠に居ーるもの 隠に居ーるもの

(齐唱) ハー ハー

(独唱) しーらさぎー (白鷺)

(齐唱) あーとを思えば たーちかねーて 水を濁さぬ
 立てやしーら鷺 立てやしーら鷺

(齐唱) ハー ハー

(独唱) かーぜ (風) がかーすみ (霞)

(齐唱) ふーき払ろーて 今こそめじし (雌鹿) ^{※4}
 逢うぞうーれしや 逢うぞうーれしや

- 勢揃い (④は雌鹿、→は向き)
 ⑧⑦⑥⑤④③②①→
- カチャカチャと太鼓のフチを叩く音に合わせ、①⑧、②⑦が移動し、対面同士間合いを計るように対峙。
 ⑧→ ←①
 ⑥⑤④③→
 ⑦→ ←②
- 太鼓のフチを叩く音に合わせ復元。
 ⑧⑦⑥⑤④③②①→
- 歌に合わせ、①を先頭に時計回りに円を描き、次の形になる。
 ① → ← ⑧
 ② → ← ⑦
 ↑③④⑤⑥↑
- 歌に合わせ、③～⑥はしゃがむ。
 ① → ← ⑧
 ② → ← ⑦
 ↑③④⑤⑥↑
- 歌に合わせ、①⑧と②⑦が対面交差で前進後退のステップを繰り返す。
 ⑧ → ← ①
 ⑦ → ← ②
 ↑③④⑤⑥↑
- 歌に合わせ、①②⑦⑧は輪になって回る。
- 歌に合わせ、しゃがんでいた③～⑥も立ち上がる。
- 歌に合わせ、雌鹿④が群れの中央に進み出て、また元の位置に戻る。

(齐唱) ハー ハー
 (独唱) おーく (奥) くま一 (熊) が
 (齐唱) おーく (奥) の ながーと (長途)
 越えかねーて つーめー (爪) を揃え
 囉すおーもしろ 囉すおーもしろ

(齐唱) ハー ハー
 (独唱) つーばくろー (燕) もー
 (齐唱) とーんぼ返り おーもしろーや
 ひとつもすげない^{※5}
 あおち (煽ち) ^{※6}かやせ (返せ) や 煽ち返せや

(齐唱) ハー ハー
 (独唱) くーに (故郷) からー
 (齐唱) いーそーぎ (急ぎ) もーどれ (戻れ)
 ふーみ (文) が来ーたー

■ 爪を揃えの歌に合わせ、太鼓はフチ
 を叩く音になる。
 ⑧ → ← ①
 ⑦ → ← ②
 ↑ ③④⑤⑥↑

■ 時計回りに円を描き、最初の勢揃い
 の形に戻る。

- ※ 1) なかだち：仲立ちなら男女の仲を取り持つ媒酌人。中立なら茶道における休憩。
- ※ 2) すだれ柳：しだれ柳の東北訛か。
- ※ 3) じゅうさん：十三、すなわち年齢と解すると幼馴染の意味になる。七月下旬から晩秋にかけて飼育する秋蚕なら、シーズンの意味になり鹿の繁殖期と重なる。
- ※ 4) めじし：シカといわずシシと歌っているのは注目点である。
- ※ 5) すげない：つれない、そつけない。ひとつもすげないは、一度ではつまらないの意。
- ※ 6) あおち：煽り風を意味する煽ち。「ち」は風の古名。かやせは、かえせの古語。

*歌詞は筆者文字起こしによる。平仮名を基本に必要に応じ意味すると思われる漢字をあてた。

(5) 八ツ鹿保存会

江戸時代以来、宇和島の八ツ鹿踊りの伝統を守り続いているのは、旧裡町一丁目の八ツ鹿保存会である。

鹿に扮した少年たちは、午前9時頃の宇和津彦神社の奉納踊りに始まり、夕方の明源寺での父母等への披露まで、途中休憩を挟みながら各所を巡るお練りの行程を立派にやり遂げた。正確に数えていたわけではないが、廻った先は50を下らない。鹿に扮した少年たちは庭先から庭先へ、駐車場スペースから駐車場スペースへと歩いて移動するのだが、途中、

気を緩めてはしゃぎ合うことも、ふざけ合うこともなかった。

彼らを先導し、歩行移動中に自動車からの安全を守り、体調を気遣い、衣装や草鞋の手直しをサポートしていたのは、背中に2本の枝角が描かれた黒いハッピ姿の八ツ鹿保存会の方々である。曾根郁夫会長をはじめ全員が少年時代に踊った経験者だという。この日は平日のため、休暇をとって参加したのは10名程だったが、会員の実人数はこの規模ではないそうだ。少年たちは運動会の振替休日を利用しての参加だった。

他に小学3年生男子7名が随行していた。先輩の演舞を見るために全行程を同行するのである。そして、随行の最後尾には、我が子、我が孫の成長を見守る保護者の姿があった。正確に言えば、随行した小学3年生も保護者も保存会のメンバーなのだそうだ。

(6) 小学4年生の社会科

文部科学省の学習指導要領では、小学3・4年生の社会科は、自らの暮らす都道府県や地域の産業や暮らし、歴史文化、伝統行事を調べ、さらに伝統行事を担う人々の思いを調べる単元となっている。宇和島の八ツ鹿踊りは、T社の小学4年生の社会科教科書の題材の一つに取り上げられている。

ちなみに、この10年の各社の小学4年生の社会科教科書を比べてみると、内容が実に豊かになっていることが分かる。かつては、地域の寺社や仏像といった有形文化財、教育施設や用水路などの有形施設、地域の偉人が題材の中心だったのが、近年は具体的な地域の伝統行事を豊富に取り入れて、地域の伝統行事を支える人々の談話を載せ、故郷への関心を喚起する内容になっている。こうした内容は、実用知や入試で問われる知識ではないが、身に着けておきたい大切な教養である。

言い換えれば、日本中の伝統行事を担う人々にとって小学4年生の社会科は、地域の伝統行事や当事者の思いを子どもたちに伝えるよい機会になっているのである。

さて、コロナ禍におけるこの2年は、宇和島の八ツ鹿踊りに直接関わる少年たちにとってどんな期間だったのだろうか。子どもの1年と大人の1年では、成長のスピードや取り返しのつかなさという点で深刻度が異なる。小学4年生から6年生までの変声期前の少年による伝統行事であれば、なおさらである。

今回4年生が初めて踊るのは通例として、実は5年生もお練りで各所を巡るのは初めて

だった。そして、経験のある6年生にしてもお練りで踊ったのは4年生のとき以来だったのである。稽古を積んできたとはいえ、さぞかし緊張したことだろう。仮に2年続けてお練りを中断していたとしたら、次回は4年生から6年生までの全員が初めてお練りを経験することになっていた。

冒頭で述べた通り、コロナ禍の影響は地域の伝統行事を担う人々にとって、行事の開催を見送るにせよ制約を設けて実施するにせよ、葛藤と苦渋の判断を迫るものだっただろう。それぞれに事情も一様ではないだろうし、どのような判断をするにしても賛否は付き纏うものである。

ただ、実際にお練りの一部始終を直に見た者として、次の点は強調しておきたい。

- ・楽しみに待っていた町の人を和ませ、間違なく喜ばれていたこと。
- ・少年たちは、故郷の伝統行事を小さな肩に背負い、立派にやり遂げたこと。
- ・そこで彼らが得たものは、自覚無自覚に関わらず、教室や図書館では経験できない一生モノの教養の礎になること。
- ・繰り返される静と動の不思議な間といい、どこか懐かしい旋律（独唱部分は東北地方の童謡『どじょっこふなっこ』の冒頭「春になれば」を彷彿とさせる）といい、シカの生態を踏まえた足の運びといい、何十回見ても飽きない不思議な魅力があること。



休憩時間に「天赦園」の園庭に展示された鹿面。

3. シカとシシと獅子

ここでは、鹿踊りの呼称にまつわる問題と南予の鹿踊りの変容について考察する。ちなみに岩手県・宮城県では、鹿踊と書いてシシオドリと呼称している。

(1) シカとシシと獅子

① シカとシシと獅子

愛媛県歴史文化博物館が、平成12（2000）年に発行した『愛媛まつり紀行 二十一世紀に伝えたい郷土の祭礼』（以下、『愛媛まつり紀行』）には、伝統芸能の県内分布図が数種類掲載されている。「鹿踊り」の分布図では、「牛鬼」の分布図と同様に南予地域のみに分布が見られる。また、いわゆる「獅子舞」の分布図によると獅子舞は県内全域に分布している。

さて、鹿踊りの呼称について同書は「『シカオドリ』、『シシオドリ』、『シカノコ』、『カノコ』などである。」と紹介している。つまり、文字表記の「鹿踊り」と「鹿の子」に呼称が各二通りあることを示している。

少し遡って、和田茂樹（当時愛媛大学教授）は『愛媛の民俗芸能』（1971）の中で、鹿踊りの呼称を次のように紹介している。

「土地では古い用語のまま『ししまい』『しおどり』（普通の獅子舞はカラシシと呼ぶ。）とか、その扮装から『鹿の子』『鹿の子踊り』『鹿踊』といわれていたし、現にそう呼ぶ地方が多い。」（『愛媛の民俗芸能』より）

和田の呼称紹介から約30年を経て、シシとシカの順番は逆転している。そして、和田は同書で鹿踊りと獅子舞の呼称の区別について重ねて言及しており、今から約50年前は「ししまい」が呼称の主流だったことが分かる。

ちなみに、筆者に話しかけてくれた80代の男性は、「私も若いころは、カラシシをやつたものです」と昔を懐かしんでいた。

『愛媛の民俗芸能』採録の17か所の鹿踊りの歌は、全て「雌鹿隠し」であり雌鹿は一様に「めんじし」「めじし」と表記されている。

以上から、南予地域の鹿踊りの古い呼称は、「シシマイ」、「シシオドリ」と推察できる。

② シカとシシ

鹿の読み方は、シカ、カ、ガ、ロクなどが一般的だが、実はシシと発音する例もある。一例をあげれば鹿威しである。本来は、案山子や鳴子と同様に鳥獣対策の農具だった。

地名検索サイトなどを利用すると想像以上に鹿をシシと読む地名が全国にあることが分かる。たとえば、京都府京都市左京区に鹿ヶ谷と書いてシシガタニと読む地名がある。『平家物語』の「鹿ヶ谷の陰謀」でも知られる。

また、『万葉集』では、雄鹿が鹿鳴するときはシカ（6巻953番など）、地面に伏す動作のときはシシ（2巻199番など）と使い分けている。古くからシシも鹿の呼称だったのである。

ちなみに、子どもたちもよく知るジブリ映画『もののけ姫』のシシ神は鹿であり、作中、主人公のアシタカが乗る鹿系の架空動物をエボシ御前は「見慣れぬシシ」と指摘する。

③ 呼称混乱の原因

柳田国男は大正5（1916）年の小論「獅子舞考」で、別物である獅子舞と鹿踊りの呼称混乱について、次のように述べている。

「獅子舞のシシという語にも少なくもある混同がある。すなわち、獸肉を宍^{しし}というより転じて、鹿すなわちカノシシを単にシシと呼んだ時代もあれば、猪すなわちイノシシを単にシシという地方もある。『万葉』のシシは鹿で『忠臣蔵』のシシは猪だ。これが仏經によく出る天竺の猛獸と音を同じくしていたのは、郷土研究者にとっては一の不幸であったが、幸いに角や口碑はかろうじてその事跡の

「湮滅を取り留めたのである。」

(「獅子舞考」より)

補足すると、『忠臣蔵』の猪は、仮名手本忠臣蔵の五段目に現れる。

日本民俗学の先駆けとなった『遠野物語』(1910)を通じて柳田は、頭に鹿角をつけた踊りと歌に「山中の牡鹿が妻を覗め妻を争う事が明らかに現れている。」(「獅子舞考」)と気付いたのだろう。『遠野物語』に採録された歌詞をみると、旧南部藩遠野は、旧仙台伊達藩北部と隣接していたためか、宇和島で聞いた「雌鹿隠し」に似た歌詞も見受けられる。

驚くことに、柳田が指摘した混同の不幸は、実は現在も続いているようである。たとえば、『日本民俗大辞典 上』(1999)は、「しまい・獅子舞」を次のように定義する。なお、大道芸人が派生させた門付芸の獅子舞は、これに含まれない。

「獅子頭を被って行う芸能で、その種類は二人立ちと一人立ちの二系統がある。二人立ちの獅子舞は二人またはそれ以上の人人が獅子頭についている幕の中に入って舞うもので、百人以上の人人が中に入って舞う百足獅子というものもあり、全国的に広く分布している。一人立ちの獅子舞は獅子踊り・鹿踊りともいわれる。一人が獅子頭に幕を下げて被り、腹の太鼓や羯鼓を打ちながら舞い、背中に神籠などをつける。東日本以北に多く分布していて、三頭・五頭・六頭・八頭・十二頭などからなる。(以下略)」

(『日本民俗大辞典 上』より)

④ 獅子舞の源流

そもそも獅子舞とは、何だったのだろうか。

森田玲は『日本の祭りと神賑』(2015)の中で外来の獅子舞を唐獅子と呼び、従来の説明から踏み出す解説をしている。一人立ち、

二人立ちの違いを次のように述べている。

「一人立ち、すなわち直立して腰鼓を打ち鳴らして踊るシシの類は、およそ日本古来のその土地に伝わるものである。『日本書紀』に、弘計王(後の第二十三代顯宗天皇)が鹿の角を奉じて舞ったことが記されるように、我が国のシシ舞いの歴史は古い。」

「二人立ち、すなわち頭の部分を受け持つ前足と、尻の部分を受け持つ後足の二人で立つシシは、外来の唐獅子である。日本のシシ舞いとは性格が異なり、それ自体に、カミのような、強い神威が期待された。」

(『日本の祭りと神賑』より)

両者は、来歴が異なるというわけである。

『日本書紀』によれば、顯宗天皇から十代後の推古天皇の二十年に、西域から吳を経て伎楽がもたらされた。この伎楽の中にあった舞が唐獅子であり、当時は師子と表記された。

森田の解説から以下要点をまとめてみた。

獅子舞の源流は、師子頭を被る四つ足(二人立ち)の獸毛に覆われた靈獸であり、音楽をともない無言で舞い、伎楽の舞場に最初に現れ舞場の邪氣を祓った。その後、獸毛を保つ獅子と様式化が進み獸毛をなくした獅子の二系統となってからも、そのカミのような神威により悪魔祓の役割を期待されてきた。



八ツ鹿踊りに先駆けて奉納された獅子舞(唐獅子)

⑤ 弊害の所在

鹿と獅子の同音による混同の弊害について考えてみたい。結論からいえば、一面では無いといえ、一面では有るといえる。

というのも、南予地域においては、少なくとも弊害はないからである。かつて、鹿踊りを主としてシシマイと呼んでいた頃は、獅子舞をカラシシと呼び変えて混同を回避していた。また、現在は、八ツ鹿や五ツ鹿と鹿の頭数をもって称するようになり、シシマイと呼ぶことも少なくなっている。さらに、鹿踊りと獅子舞（唐獅子）を誰も同類とは思っていないからである。それは、前出の『愛媛まつり紀行』が、両者の県内分布図を別々に作成していることからも明らかである。

では、どこに弊害があるかといえば、柳田国男が百年前に指摘した「郷土研究者にとつての不幸」が続いていることである。日本民俗学の主流が、二人立ち一人立ちという技巧を用いて、あれもこれも獅子舞のカテゴリーに含めて整理すると、地元の伝統芸能に関わる教育委員会も博物館も無縁ではいられない。その影響は、分かりにくさとして文字を手掛かりに土地の伝統行事や伝統芸能を知ろうとする一般人に及ぶこととなる。

本稿を書くにあたり、最も頼りにしたのは、前出の『愛媛まつり紀行』であり、中でも同書に収録された大木敬久（当時愛媛県歴史文化博物館学芸員）の「南予地方の鹿踊の伝播と変容」である。その冒頭の一一行目から、鹿踊りを一人立ちの獅子舞であると定義しなければ、なかなか本題に進めないところに、この不幸が滲んでいる。

(2) 南予の鹿踊りの変容

① 除災招福と鎮魂供養

本稿の1. (2)で紹介したとおり、宇和島の八ツ鹿踊りの役割は、秋祭りにおける除災招福にある。それは、宇和島藩から伝播した南

予地域の鹿踊りも同様である。

一方、ルーツである旧仙台伊達藩領の鹿踊の役割は違っていた。前出の「獅子舞考」で柳田は、「孟蘭盆に鹿踊りを行う例は東北には多い。」と指摘している。

この点、大木は、『仙台市史』から仙台地方でもかつては盆の先祖供養の際に行われていたことを確認し、また、『岩手の民俗芸能』から現在も盆の先祖供養として依頼された家の庭で踊り、神社の例祭に奉納し、依頼に応じて芸能大会や祭りで演じられている具体例を確認している。そのうえで、東北の鹿踊の施行目的の筆頭に先祖供養をあげている。

菊地和博は、『シシ踊り 鎮魂供養の民俗』(2012)で、獅子舞とシシ踊りは成り立ちも芸態も異なるという立場から、従来獅子舞と称され分類されてきた伝統芸能を再検討している。この中で菊地も、諸資料と聞き取り調査により、結論において大木と概ね同様の実態を報告している。そのうえで、菊地はある興味深い情報を紹介している。

それは、東北のシシ踊りに「雌ジシ隠し」の歌があること、また、現在も鹿の大生息地である岩手県南東部の五葉山（旧仙台伊達藩の直轄地で御用山とも呼ばれた）にまつわる起源伝承と岩手県内に集中する83基もの「鹿踊供養碑」（他は宮城県内5基）である。その起源伝承とは、年貢代わりに大量の鹿の乾肉、毛皮、角を納めるに至り、鹿の靈を慰めるために鹿踊りが始まり、次第に近隣農漁村の大漁・豊作の祈願となり、やがて先祖供養のかたちをとるに至ったというものである。

ここで南予地域の鹿踊りとルーツである旧仙台伊達藩領の鹿踊の目的の違いを整理しよう。前者の目的は除災招福であり、時期は秋、先祖供養の要素はない。後者の目的は、先祖供養であり、時期はお盆である（だった）。

② あまりに違う風貌

宇和島の八ツ鹿踊りと旧仙台伊達藩領の代表的な鹿踊（愛媛県歴史文化博物館の展示資料）を比べると、風貌の違いに驚かされる。宇和島以外の南予地域の鹿踊りの鹿面もおよそ柔軟な顔であるのに対し、ルーツ側の二例は、鹿角はあるが、恐ろしい顔をしている。

下の写真の右側が幕踊り系、左側が太鼓踊り系と区別される。双方とも多頭の鹿群で演舞する。幕踊り系は、太鼓を持たず半身を覆う幕を内側から持って踊り、お囃子が別につく。衣装に伊達家の九曜紋があるのは、特別な関係を示すものである。太鼓踊り系は、太鼓を露出させて打ちながら踊り、他にお囃子はつかない。また、背中に二本の非常に長いササラを付けるのが特徴である。岩手県では、南部に太鼓踊り系、北部に幕踊り系が分布している。なお、この代表二例の分化の事情は未詳のようである。

③ 目的も風貌もなぜ違うのか

南予地域の鹿踊りとそのルーツ側では、目的も時期も風貌も違うのはなぜだろうか。

前出の大木敬久は、悪魔祓いを期待された牛鬼と唐獅子の存在が、鹿踊りに祝福芸を期待させたのだと変容の理由を述べている。根拠は、昭和11（1936）年に県が行った「神社に関する調査」である。



ルーツとされる東北の鹿踊。右が幕踊り系、左が太鼓踊り系。

確かに、牛鬼と唐獅子の強力布陣を擁すれば、鹿踊りに邪気を祓い、靈を鎮める役割を求める必要はないかもしれない。

ところで、岩手県北部の田野畠村に幕踊り系の菅窪鹿踊すげのくぼしおどりがある。インターネットサイト上の画像や動画を見る限り、鹿の表情は写実的で恐ろしくはない。雄鹿の群れに一目で雌と分かる角のない雌鹿が一頭いる。江戸時代後期の博物学者、菅江真澄の「凡國奇器」には、「七月 奥南部鹿踊面」と添え書きのあるスケッチ画がある。その鹿面は、田野畠村の鹿面に似ている。これは逆にルーツ側の変容も疑ってみる必要があるのかもしれない。

また、中村規の『江戸東京の民俗芸能3 獅子舞』（1992）には、いわゆる一人立ちの三匹獅子舞（菊地和博によれば三頭シシ踊り）が、写真や歌を交えて57例紹介されている。顔は獅子や龍に似ているが三頭のうち二頭は鹿角のある雄、一頭は角のない雌の構成で、多くの例に「雌獅子隠し」の歌がある。

南予地域の鹿踊りのルーツは、仙台伊達藩であることは確実としても、その先のルーツとなると一筋縄では行かなそうである。

（参考資料）

- ・『新字和島の自然と文化（一）再訂増補版』宇和島市教育委員会・2018年
- ・『新字和島の自然と文化（二）』宇和島市教育委員会・2015年
- ・片山恭一『世界の中心で、愛をさけぶ』小学館・2001年
- ・ドナルド・キーン「四国さかさ巡礼記」「碧い眼の太郎冠者』中央公論社・1957年
- ・『愛媛まつり紀行 二十一世紀に伝えたい郷土の祭礼』愛媛県歴史文化博物館・2000年
- ・和田茂樹『愛媛の民俗芸能』愛媛文化双書刊行会・1971年
- ・福田アジオ 他『日本民俗学大辞典 上』吉川弘文館・1999年
- ・柳田国男「獅子舞考」『柳田國男全集18』ちくま文庫・1990年
- ・柳田国男『新版 遠野物語』角川ソフィア文庫・2004年
- ・森田玲『日本の祭りと神賑』創元社・2015年
- ・大木敬久「南予地方の鹿踊の伝播と変容」『愛媛まつり紀行 二十一世紀に伝えたい郷土の祭礼』愛媛県歴史文化博物館・2000年
- ・菊地和博『シシ踊り 鎮魂供養の民俗』岩田書院・2012年
- ・菅江真澄「凡國奇器」『菅江真澄全集 第九巻』未来社・1973年
- ・中村規『江戸東京の民俗芸能3 獅子舞』主婦の友社・1992年